

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	宮本啓子
論文題目	岸田國士前期戯曲論 純粹演劇における「不在」の表象
審査要旨	
<p>岸田國士は日本の近代演劇の発展に大きな役割を果たし、近年再評価の機運も高まっている。しかしながら、これまでの研究は歴史的観点、伝記的観点からのものが主流で、戯曲自体が演劇研究の対象として詳細に検討されてきたとは言い難い状況である。それに対して本論文は、前期戯曲を綿密に分析し、必ずしも具体的に理解されてこなかった岸田の「純粹演劇」の理念を、演劇学的観点から再考したものである。本論文は特に、舞台には登場しないにもかかわらず登場人物たちに多大な影響を与える人物や事物に着目し、その「不在」を中心に戯曲を分析することで、岸田のドラマトゥルギーと演劇観の特質を明らかにした点に独創性がある。</p> <p>本論文は三部からなる。以下、各部・各章の内容を要約する。</p> <p>第1部「脅かす「不在」——自意識と不在」では、戯曲『古い玩具（おもちゃ）』と『屋上庭園』を取り上げ、不在の他者からの視線がいかに関登場人物を脅かしているかを読み解き、「純粹演劇」を掲げた岸田がいかなる演劇を目指したかを明らかにした。</p> <p>第1章 『古い玩具』と「二元論」では、岸田の第一作目の戯曲『古い玩具』が検討された。本作は、これまでは作者・岸田國士のフランス留学体験に引きつけて、二十世紀前半の海外における日本の知識人の人種的葛藤を描いた戯曲とされてきた。それに対し本論文は、「西欧／非西欧」、「白色人種／有色人種」といった二元論的世界観が実は実体ではなく、登場人物たちの内面化した他者の目として機能していることを指摘した。また、先行研究が主人公の白川留雄を中心に論じてきたのに対し、階層秩序の最下位におかれた留雄の幼馴染の手塚房子に着目し、房子にその二元論を乗り越える可能性を見出した。第2章 『屋上庭園』に描かれた「視線」では、百貨店の屋上庭園で偶然出会った二組の夫婦が気まずく別れるまでを描いた『屋上庭園』を、<視線>を軸に分析した。それによって、これまで貧富をめぐるウェルメイドな喜劇とみなされてきた本作を、近代日本の急速な商業・文化・都市の変容と、それに付随しておこる価値観の変化に翻弄される人々を描き出した作品として捉え直した。</p> <p>第二部「魅了する「不在」」では、戯曲『チロルの秋』と『歳月』を取り上げ、両作品に共通する、不在の人物を核としたメタシアターの構造を明らかにした上で、岸田の演劇論として読み解いた。</p> <p>第3章 『チロルの秋』に見る「虚構」の可能性——夢・遊戯・演劇」では、『チロルの秋』において、旅人のアマノとステラがチロルで過ごす最後の晩に相手の恋人に扮する「空想の遊戯」を行なうことに着目し、不在のステラの元恋人をめぐるこの劇中劇に、現実の介入をよしとしない岸田の純粹演劇の理念が凝縮されていることを明らかにした。第4章 「メタシアターとしての歳月」では、浜野家を舞台に浜野八洲子と斎木一正の恋愛、結婚、離婚、そして八洲子が一正との復縁を拒否するまでの十七年間を描いた戯曲『歳月』を論じた。本論文は、筋を展開させる中心人物でありながら一度も舞台に登場することのない一正に着目し、八洲子が語る一正像は、俳優が「何を語り、何のために動くかではなく、如何に語り、如何に動くか」こそが重要であるとする岸田の純粹演劇論の隠喩であると指摘した。これらの二作品を、このように岸田の演劇論として読み解く研究はこれまでになく、作品論として新しいのみならず、岸田の純粹演劇の理念を理解する上でも有意義であると言える。</p> <p>第三部「身体に巢食う「不在」／社会に蔓延する「不在」」の第5章 『風俗時評』の正体不明の「痛</p>	

み」では、戯曲『風俗時評』を取り上げ、各場において登場人物を次々と襲う正体不明の「痛み」の表象を分析した。それによって、先行研究では単純な社会風刺劇と捉えられてきた本作が、「純粋演劇」の理念によって演劇のための演劇を目指してきた岸田の転換点であることを明らかにした。岸田が『風俗時評』において、演劇がいかに社会を表象し批判しうるかという問いを發し、その問いに答えるべく演劇と観客の新たな関係の構築を模索し、ブレヒトの叙事的演劇と親和性のある新たな形式を生み出すに至ったという本論文の指摘は、今後の岸田研究に大きな影響を与えうるものであろう。

終章では、岸田が演劇の表象の可能性を「不在」に見出した理由は、舞台に登場しない「不在」の人物・事物は劇中の当事者ですら言語化も論理化もできないものであり、そのような「不在」を表象することに文学にはない演劇固有の表現の可能性を見出したことにあると結論づけた。

以上述べてきたように、本論文は、岸田國士の前期戯曲を、核となる登場人物や事物の「不在」という視点から分析することを通じて、通俗的筋立てを排し「純粋演劇」の理念のもとに劇的文体を追求した岸田のドラマトゥルギーと演劇観の特質を明らかにしたものである。

審査委員会では、岸田戯曲に真摯に向き合い、綿密で丁寧なテキスト分析を行なったことが高く評価された反面、書かれていないことをも読み込もうとする過剰な解釈もあるのではないかという指摘や、同時代の文学状況や出版状況への目配りが必ずしも十分ではない、などの指摘がなされた。

しかしながら、後世に多大な影響を与えながらも戯曲自体が詳細な分析の対象になってこなかった岸田國士の前期戯曲の緻密な検討を行ったこと、岸田戯曲研究に「不在」という新たな視点を導入したこと、また、個々の作品について定説を覆し新たな解釈を提示して従来の岸田観を刷新したこと、さらに、岸田の「純粋演劇」の理念が抽象的なものではなく劇作において具体的に追求されていたことを明らかにしたことの意義はきわめて大きく、今後の岸田研究において必ず参照されるであろう重要な研究であることは言を俟たない。

本論文は、以上の点から、戯曲研究と演劇論研究の両面において岸田國士研究に大いに寄与しうるものであると言える。よって審査委員会は、本博士学位請求論文を、博士学位(文学)を授与するに相応しい論文であると判断する。

公開審査会開催日	2013年 6月 27日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学・教授	Ph.D. (アイルランド国立大学ダブリン校)	岡室 美奈子
審査委員	早稲田大学・教授	博士(文学)早稲田大学	十重田 裕一
審査委員	大阪芸術大学・元教授、演劇評論家		大笹 吉雄
審査委員	桐朋学園芸術短期大学・特任教授		井上 理恵
審査委員			